

第5回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「家族になろう」

栃木県 作新学院高等学校 三年 山本晴佳



賢治のまちから
高校生★童話大賞

栃木県 作新学院高等学校 三年 山本 晴佳

『家族になろう』

家へと走つて帰りながら、私はわくわくが止まらない。今日、ママが犬をもらつてくることになつてゐるのだ。玄関のチャイムを押すとママがドアをあける。私はランドセルを肩から下ろしながら、急いで靴を脱いだ。

「よ、ワンちゃんは？もう来てるんでしょ。」

「ほらほら慌てないの。あんまり騒ぐと驚いてしまうでしょ。居間にいるわ。」私はなるだけ足音を鳴らさないように、でも出来る限りの駆け足で向かう。

居間のドアの前でちょっと止まつて、ドキドキする胸を感じながら、息をのんでノブを引いた。頭の中では小さくてかわいい、毛のふわふわした犬が走り回つてゐる。どんなかわいい子だろう・・・。

開いたドアの向こうには――、大きくていかめしい顔をした、一匹の茶色い犬がいた。

「・・・この子？」

「町田さんのところのロクよ。町田さん長期入院することになつてね。その間、人に預けっぱなしなのもかわいそุดから、もらつてくれる人を捜してたんですって。」

「ちがうよーっ。」

私は思わず声を上げた。

「私が欲しいのと全然ちがう！だつて子犬じゃないしつ。毛もふわふわじゃないし・・・。」

ロクは私を一回り小さくしたくらいに大きい。毛は短く、その茶色もなんだかくすんでいる。それに何より、顔がおつかない。



「やだー、怖いよ。今にも噛み付いてきそう。私さわれない。ね、町田さんに返して来よう。」

こつちを見ているロクの目は鋭く、口元からのぞく歯は立派でとがっている。私は必死でママのエプロンを引っぱった。

「何いってるのつ。ともか、犬が飼いたかったんでしょ。ロクは大人しいし良い子よ。」

「うそ、ともか食べられちゃうよ。こんな大きいんだよ。ともかなんてペロリだよ。」

「もう、見た目で判断するんじゃないの。ロクを飼うことはもう決まったの。」

「そんな・・・」

私の言葉をさえぎるように玄関で音がする。パパが帰ってきたんだ。ママは出迎えに行き、私は文句を言うことができなくなってしまった。パパはというと、帰ってくるなりロクを見て嬉しそうに体中をなでまわした。
「なんだ、すいぶんと男前じやないか。」

男前よりかわいい犬の方が良いよ、と思う私をよそに、パパはロクが気に入つたようだ。

「ロクの皿は？歓迎のごちそうをやろう。」

ママが用意したお皿に、パパが自分のお皿からお肉を取つてのせる。ロクは怖い顔に似合わずマナーが良く、静かにお皿の前に座り、ママがぽんと背中を叩いてからようやく食べ始めた。パパはその姿にさらにロクを気に入つたみたい。また切れお肉をロクのお皿に入れだ。

「そうだ。今度の休みの遊びに行く予定なんだけど、急に仕事が入っちゃつたんだ。ともかには悪いが、今回を取りやめだ。」

「ええつ。」

いきなりの言葉に私は不満の声を上げた。



「仕方ないでしょ。パパはお仕事なんだから。また今度連れていくつてあげよわよ。」

「そんなこと言つて、今度いつになるか分からぬじやないつ」

楽しみにしてた犬は期待と正反対、そのうえお出かけまでなくなるなんて、最低だよ。私は涙ぐんだ。

「やだ、やだ、やだあつ、行こうよ！」

「わがまま言うんじやありません！」

ママはついに怒つてしまつた。私はさらに涙が止まらなくなり、ママとパパが食べ終えても一人でテーブルについたままぐずぐず泣いていた。するとなんだか足にあつたかいものが当たる。なんだろう、とテーブルの下を覗き込むと、そこにはロクのあのおつかない顔があつた。

食べられる！ 涙が一瞬でかわいた。でもロクは噛みつきも吠えもせず、ただ座つて私を見上げていた。そして私が静かになつたのを見てから、ロクは立ち上がって私のスカートの裾をくわえる。裾を引かれ、促されるよう、私は立つ。そしてそのままロクは私を引っぱつて歩き出した。

「ちょっと、なに、なに？」

ロクは台所の方へ入つていく。流しで夕ご飯の片付けをしていたママが振り向いた。

「どうしたの？」

怒られたばかりの私は気まずくて戻ろうとするのだけれど、ロクの力は強くて逆らつてもぐいぐい連れてかれてしまう。結局、ロクと共にママの前へ。するとロクはそこでピタリと止まつて動かなくなつてしまつた。

私は困つた。スカートを放させようとして、ロクをちよんちよんとつづいてみたり、「お願いだから放して、ね？」と恐る恐る話かけてみたり。けれどロクはその場を動こうとしない。どうにもできずに私は途方にくれてママに目を向けた。





ママは私とロクの様子を見て吹き出した。笑っているママを見ていると、始めは居心地の悪かった私もだんだんおかしくなってきて、気まずさを忘れてエヘヘと笑う。ママは目元にじんじん涙を拭いて、

「ああおかしい。あなた達何やつてるの？」

私との間に座り込んだロクの顔を両手で包み込むようになでた。ロクはただ黙つてされるがままになつていて。私もおそるおそる反対側からロクの顔を覗き込んだ。怖い顔のママの手でくしやくしやにされている。

「ともかもなでてみなさいよ。このとおり噛んだりしないから大丈夫よ。」

私ももう一度ロクの顔を見る。そしてそれから、そつとその茶色い背中をなでた。手の平のロクのちくちくとした毛の感触と、体温が伝わってくる。微妙に鼓動も感じられて、ああ、生きてる、と当たり前のことを思う。

当たり前のことなのに、手を伝わつてくるその力強い脈打ちが、とても

神秘的で、感動的に感じた。それに、とても優しい手触り。

ロクは私の手が離れると、スカートを放し居間へと戻つて行く。その後ろについて私もテーブルに戻る、そして途中になつていたご飯をまた食べ始めた。

ふと思い立つて、ロクの前にある空っぽになつたお皿に自分のお肉を一切れつまんで、少し上から落としてみる。ロクが私を見る。

「あげるよ。仲直りさせてくれたお礼。」

私が食べるジエスチヤーをすると、くんくんと匂いを嗅ぎ始めた。パパのみたいに食べててくれるかな。つい息を止めて私は見守つた。

その前で、ロクはぱくんとお肉を口に入れた。

「わ・・・食べた！」

思わず声が漏れる。ロクはこっちを気にするようにちらちら見ながら、黙つてもぐもぐし続けている。そんな様子のロクはおかしくて、なんだかかわいらしくさえ見える。



私はだんだん怖さが薄れてきて、テーブルの上にあつたパンを小さくちぎってロクが食べているお皿の端にちょこんと置いてみた。それもロクが食べると私はさらに力づき、今度は手の平にパンをのせてロクに差し出す。

ロクは上向きに様子を窺い、顔を近づける。ロクの鼻の当たる感触が指の先に感じられてこくりと息を飲む。ロクはもう一度私を見つめて、それからキバが当たらないようにパンの方かじって、上手に口を入れた。もぐもぐと動く口を見て私は嬉しくなって、ゆかいになつて、すごくすごく胸が弾んで、それで、ぞれで・・・・・・・つ。

私は興奮して、今の出来事を知らせに台所に駆け込んだ。

「ママ、ロク食べたよ！ 私の手からパンを食べたよ。」

このとから私はロクの食事係りになつた。朝はドッグフードと新しいお水を準備して、お昼は学校があるからできないけれど、夜にはロクのお皿にテーブルの上の料理を少し分けてあげるの。

ロクはとても賢く、私のイスの横にロクのお皿を置くようになつたら、ご飯の時間になると自分からそそこに座るようになつた。私が「ロク」と呼ぶと、食べているお皿から顔を上げて、私が新たな料理をよそうのも待つ。犬を飼つたことのない私にはロクとの散歩も遊びもお世話も、何もかも初めてづくしだ。学校から帰ると、一目散にロクのところへ行く。毎日が発見の連続だ。一つ発見する度に、また一つロクを好きになつていく。

たとえば、日のあたる窓際で、お気に入りの黄色のクッションに横になるのがロクの日課。それで、眠たいときはその迫力のある目元をとろんとさせている。もうロクのことは、ちつとも怖くない。散歩のときに転んだ私を起こしてくれるぐらい、ロクが優しいっていうのだつて、私は知つたんだから。



「今日はちょっと遠出してみようか。」

あるお休みの日の散歩。私は思いつきで、いつもの散歩コースの折り返し地点である公園を通り抜け、先へ進むことにした。その道は見知らぬ団地の中に入り込んでいた。

この辺りは家から離れていることもあって、あまり馴染みがない。きよろきよろと周りを眺めていると、私の歩調に合わせてゆつたりと歩いていた口クが、ふいに止まった。

「口ク？」

口クは耳をピンと立てて緊張した様子に見える。じつと視線を宙の一点に向け、私の言葉にも耳を貸さない。らしくない様子に心配になり、私が口クをなでながら隣にしゃがみ込もうとしたとたん、口クは駆け出した。突然のことには散歩紐を放してしまった。

「口ク！待つて！」

口クは止まらない。すごい勢いでいちもくさんにどこかへと走っていく。懸命に追いかけてはみたものの、すぐに見えなくなってしまった。私は夢中で口クが曲がった道に入った。と、その角の家の前に口クは座っていた。

「口クウ・・・ッ。」

私はほつとして駆け寄る。息が切れてぜいぜいしながら口クの頭をなでたら、その体はいつもとちがって強ばっていた。驚いて覗き込むと、堅固な顔をより険しくさせて、目の前の家を凝視している。

私はその家の表札を見た。そこには、町田、と書かれている。もしかして、口クを前に飼っていた、町田さんの家なんだ。私は表札から目を離して、口クへと視線を戻す。

口クは門の中に入り、うろうろと家の周りを熱心に嗅ぎ回っている。でも、家の中に人がいないのが分かると、しょぼんとしつぽを垂らして玄関の前に戻ってきて、またそこに腰を下ろした。じつと家を見つめる。



賢治のまちから

高校生×言語大賞

クウーン、と口クは悲しそうに一鳴きした。

その一声で、私の胸を締め付けるには十分だつた。口クの声は無人の家の
中へ吸い込まれていく。見てられなかつた。

「町田さんはいないよ。帰ろう、口ク。」

くいっと軽く首輪紐を引いても、口クの体重は重く、その場にとどまる
うとする。少し強めに引っ張る。口クはいやいやをした。あの優しい口クが、
とてもかたくなだ。

ふ、とさみしくなつて、私はそれ以上口クに何もできなかつた。

口クはずいぶんと長いこと町田さんの家の前にいた。家に帰つてからも
元気がなくて、ご飯もいつもの半分しか食べなかつた。

「口クはどうしたの？ なんだかしょんぼりしているけど。」

パパとママに聞かれても、本当のことを告げる気にはなれなくて、「よく
分からないけど、今日はなんだか元気がないの」と曖昧な返事をする。

「そう。風邪でもひいたのかしら。動物病院でも調べておこうかしら。」

「うん。でも少し様子を見てみよう。明日には元気になるかもしれないし。」
期待を込めてそう言つたものの、口クはそれから毎日、どこか
しょんぼりしたままだつた。

「口ークッ。ほら、おいしそうでしょ？ 私のお小遣いで買つたんだよお。」

私は口クに元気になつてもらおうとあれやこれやと手を尽くす。何度も
デラッシングをしたり、たくさん話しかけたり。今は口クの目の前に犬用
のビーフジャーキーをひらひらさせている。口クはしつぽを一振りさせて
顔をちょっと上げた。でもそれだけ。食べてはくれなかつた。
私はため息をついた。一番高くておいしそうなのを買つたんだけど
なあ・・・。あきらめてジャーキーを袋に戻す。

「ようし、じゃあお散歩に行こう！」



私はがっかりする気持ちを追い払うように勢いよく立ち上がり、壁に掛けてある首輪を取つて、口クよつけた。

「口クの散歩に行つてくるねつ。」

ママに言つて家を出ると、外の天気は最高だつた。雲一つない青い空はいつもより高くて、日差しはぽかぽかと口クの茶色い毛皮と私の肌にふりそそぐ。

こんなに天気が良いのだから、川原のほうに行つてみよう。あそこは気持ち良いし、散歩している他の犬たちがたくさんいるから、口クに友達が出来るかもしね。私の隣を心なしかうつむいて歩いている、口クの垂れたしっぽを見ながら、私はそう思つた。

想像通り、河原にはたくさんの人や犬がいた。青々とした芝生と眩い光がとても気持ち良い。私は口クを振り返る。口クは眩しそうに目をしばしばさせて空を見上げていた。

「口クッ。」

私は持つてきたボールを思い切り投げる。口クはそれを目で追いかけ、芝生の上で弾むのを見ると、駆け出してちゃんと取つてきた。

「すごいすごいっ。」

私と口クはボールを投げたり、走つたり、芝生の上に横になつてみたり、とにかく口クが喜びそうなことを片端からやつた。久々の口クの活発な姿を見て、私は気分が高揚するのを感じた。

ほどほど遊んだところで、私はごそごそとポケットからさつきのジャーキーを取り出し、今度こそ、と口クにあげてみる。口クはくんくんと匂いをかいで、でもやっぱり、食べてはくれなかつた。

だめか。がっかりして、さつきまでの明るい気分がウソのように流れる。心地の良い風も、日光で暖められた地面も、隣にいる口クも、何一つ変わらぬしのいのに、すべてが遠く感じられた。



横になつたロクの体を首からしつぽまで、ゆっくりなでた。静かになつた私の横で、ロクも顔を伏せてしまつてゐる。

私は立ち上がつた。ロクもそれをみて立ち上がる。頭の中に相反する思いを抱えながら、私は一つの場所に向かつて歩き出した。行こう、と思い、行きたくない、とも思う。

もと来た道を戻り、いつもの散歩コースへと出て、折り返し地点の公園を抜けてー。

ロクは行き先に気づいたのか、顔をきょろきょろと動かして反応をし始め、次第に私を引っ張るようになる。そして町田さんの家の前に着くと嬉しそうにしつぽを大きくばたつかせた。家の門の数歩前で立ち止つた私が首輪の紐を手放すと、こらえ

きれないように門の中へと飛び込む。

私が何をしても落ち込んだままつたのに。ロクは今、とても潰刺として町田さんの家の様子を窺つてしる。目は喜びできらきらしている。あつという間に元気になつた。

けれどロクはそれから町田さんがいないことを確かめると、がつくりしたように頭を下げて戻つてきた。帰りの道を、私もロクも肩を落として歩いた。ロクはまたすっかり元気をなくしている。私も泣きたい気持ちだ。

驚じや、だめなんだ。私は本当の意味でロクの家族にはなれない。ロクの中ではいつまでも町田さんだけが家族なんだ。私じゃロクが本当に欲しい物はあげられない。

上下に揺れるロクの大きいはずの背中がやたらと小さく思える。下を向いた顔や、とぼとぼ歩く足と垂れ下がつたしつぽ。それらがとってもかわいそうで、愛しくて、大切で・・・・、幸せにしてあげたかった。

家に帰り、ロクの首輪を元の場所に片付けながら、私は台所のテーブル

でお茶を飲んでいたママに話かけた。

「ママ、お願ひがあるんだけど。」

「なに？何かおねだりでもするの？」

「口クをね、・・・口クを、町田さんに返すことってできないかな？」

ママは目を丸くして私を見た。

「急に何を言うの？口クのことあんなにかわいがってるのに。嫌いになつたの？」

「ちがうよ。そうじゃない。口クは大好きだよ。でも、口クはうちよりも町田さんの家で暮らすほうが幸せなんだよ。だって口クの家族は町田さんなんだもん。」

しゃべっているうちに私は語尾がだんだん弱くなり、最後は消え入るような声になつた。

「・・・前に町田さんの家に行つたら、口クはそこからちつとも動こうとしなかつたの。最近元気がないのも、それが原因。私が何をしてもダメだつたのに、町田さんの家に行つたらすぐに元気になるし。でも町田さんは家にいなからまた落ち込んじゃうし。

「口ク、かわいそうだよ。このまま町田さんと離れたまじや、かわいそ
う・・・・・。」

ママは息をついて、しゃくり上げる私の背中をさすってくれた。その手の優しさに、だんだんと頭がふんわりしてきて、少し夢見心地になつて、そういえばママとケンカをしたとき、口クが仲直りをさせてくれたなあ、なんてふつと思い出した。

ママの手はとつても気持ち良い。ずっと小さな頃から思つてた。まるで魔法みたいだつて。どんなときだつて触れていると、気持ちを和らげてくれる。温度、手触り、匂い。全てが悲しいことを、みんな包み込んでくれる。

―― 家族つて、こういうことなんだ。生まれたときから体に浸み込ん





賢治のまちから

高校生×富野大賞

でるみたいに、側にいると居心地が良くて心がほつとする。友達も先生も
どんなに大好きな人でも、その代わりにはならない。私にとつての家族は
パパとママだけなのと同じように、口クには町田さんじやなくちやだめな
んだろう。

たとえば、何年も何十年も一緒に暮らして、側にいるのが当たり前にな
るくらい多くのときを過ごせば、家族になれるかもしれない。でも、今はー。
ママは少しの間を空けて、それから「実はね」と口を開いた。

「町田さん思いのほか病気の状態が軽くて、すぐに退院できるかもしれな
いんですって。」

私はママを見つめる。

「だから町田さんに口クを返すことはできると思うわ。でも、ともかはそ
れでいいの？」

「…………うん……、いいの。」

私は口クが本当に大好きだけれど、だから本当にさみしいことだけれど、
口クにはそれが、町田さんの側にいることか、本当の幸せなのだから。

パパにも帰宅してからその話をした。パパも残念そうな顔をしたけれど、
ここ何日もの口クの元気のない姿を見ていたので、「犬っていうのは忠誠心
が強いからなあ」と言つて賛成してくれた。町田さんが退院するのを待つて、
それから口クを連れて話をしに行くことになった。

できることなら口クにそのことを教えて元気にしてあげたいけれど、そ
れはできないので、その代わりに私は今まで以上に一生懸命世話をするこ
とにした。口クのブラッシングも、シャンプーも、ご飯をあげるのももう
すぐできなくなる。それは、とてもさみしい。

私を見上げる口クの表情、指を通る毛皮の感触、穏和な仕草。ぜんぶ宝
箱につめて、ずっと大切にとつておけたら良いのに。そうしたら心の真ん

中において、さみしくなる度に、蓋を開けるのに。

それから一週間後町田さんが退院し、その翌日に町田さんの家を訪ねることになった。

「ロク、おはよう！」

その当時の朝、私は張り切ってロクのご飯の準備をする。いつも通りテーブルと床にお皿を並べて食べながら、自分のワインナーを分けてあげた。それからいつもより何倍も何倍も丹念に、毛皮の手入れをする。

「ようし！世界で一番かっこいいよ。」

両手でロクの頬を挟み、満足して頷いた。

「おーい、そろそろ行くぞ。」

「はあい。」

パパに呼ばれて、私はロクとママとともに家を出て、車に乗り込む。

「ロクがいなくなるとさみしくなるなあ。」

後ろのシートにロクが行儀よく座り込んだのを見て、パパが呟いた。車はパパの運転で出発する。車だと町田さんの家まではすぐだ。あの公園沿いの道路にさしかかると、今まで大人しかったロクがそわそわし始めた。町田さんの家の近くだと分かつたんだろう。

「…………ねえパパ、私、ここで降りていい？」

「町田さんの家に行かないのか？」

「あつちまで行つたらロクと別れられない氣がする。ここから歩いてかえるよ。だめ？」

「まあいいよ。町田さんにはパパたちから説明しておくさ。」

「お願ひ。」

パパが道路の脇に車を寄せる。私は後部座席に並んで座っていたロクの首に抱きついた。顔に短い毛があたつてこそばゆい。腕の間から、ロクの

賢治のまちから 高校生☆電話大賞



匂いがする。昨日したばかりのシャンプーの匂いも香ってきた。あつたかい体。とうとう涙がこぼれてしまった。私は泣きながらロクの毛に顔を埋めた。

「ここでお別れだよ、これ以上一緒に行くのはつらいから。ついていけなくてごめんね。

ロク、大好きだよ……。幸せになるんだからね……。大好きだよ……つ。

言つてロク放し、すぐさまドアを閉めた。

「出発して良いよ。」

「じゃあ、行つてくるからね。」

ロクが首をかしげてウインンドー越しに私を見ている。私もロクを見た。ロクと、家族になりたかった。

車が発信する。ロクは遠ざかっていく私に合わせて首を動かす。その姿が最後だった。日の光が反射して車の中が見えなくなり、やがて車すら見えなくなつた。私はしばらく誰もいない道を見続けてから、家に帰つた。

居間のフローリングにごろんと横になつて、窓から入る太陽の光に目を細める。こんなときなのに、空がひれいだな、と思った。光の中に金の粉のようなほこりから舞つている。頭の下にひいたクツショソンから、ロクの匂いがした。ついさつき抱きしめたロクの感触が思い出される。

「ロク……。」

そのとき、ガチャンと玄関のドアが開く音がした。もうパパ達が帰つてきた？

その後のダカダカダカツというすごい足音に私はびっくりしてはね起きる。

すると居間へのドアがこれまで大きな音をたてて開けられて、そこから、ロクが飛び込んできた。

「ロク！」

口クは私の膝に両手をのせて「ワン！」と鳴いた。口クの後からパパとママが姿を現す。

「なんで口クと戻つてきてるの？」

驚く私に、ママが疲れた様子で言つた。

「あの後口クが急に騒ぎ始めたのよ。酔つたのかもしれないと思つて外の空気を吸わせようとドアを開けたら走り出しちゃつて。」

「あわてて追いかけたんだ。町田さんの家に向かうのかと思つたら、口クはうちに戻つていくじゃないか。で、玄関のドアを開けたとたん、今のとおりだ。いやあ、驚いた。」

私は信じられずに目の前の口クを見る。

口クは窺うようにじつと私を覗き込んでいる。その日は、「ここにいてもいい？」そう聞いている気がした。凜々しい顔つきの口クの、そんな気弱な様子がとつてもかわいくて、私は笑う。胸に込み上げてくる嬉しさと共に。

うん、いいよ。ここでずっと一緒に暮らそう。毎日並んでご飯を食べて、いっぱい遊んで、いろんなことをしようよ。何年も、何年も一緒に。側にいるのが当たり前になるまで。

ねえ口ク、家族になろう。

